

札幌植物雑記帖(2)

原 松 次

秋に咲くギンリヨウソウモドキ

昨年5月21日、札幌に隣接した広島町大曲のありふれた雑木林に一步入ったとき、目についたのが興味あるこの植物である。アキノギンリヨウソウの別名があるように、ギンリヨウソウと違い秋咲きなのに、春たけなわのこの時期にそれと分ったのは、果茎は枯死後も残存する特性があるため、目前にそれが2本つつ立っていた。その後7月下旬、今度は市内白石区厚別南緑地にもこれがあることを知った。そこで今後はここを観察地とすることとした。

まず花を見るためたずねたのは9月5日、すでに新しい茎が6本、地上10cmほどに伸び上りキセル状の花が咲き始めていた。ところが、そこから20mほどの所の長さ60cmばかりの長方形の中に、なんと49本も簇生してびっくりした。しかしここには前年度の枯れた果茎は見当らなかった。1か月後の10月5日、新果茎を撮る楽しみを胸に再訪したのであるが、それは完全に裏切られ、そこには何んの痕跡もなく、ただ枯れた木の葉が散らばっていた。1本も結実できなかったのだろうか。どうも解せない。今年うまく芽を出してくれれば、よりしげく足をほこびたい。

葉緑素を持たないこの仲間は、共生するキノコやカビから栄養分をもらっているとのことであるが、詳細は不明という。なお本種は函館、恵山、厚沢部、虻田それに室蘭にもある。

水陸両生のエゾノミズタデ

札幌で初めて出会ったのは、茨戸福寿園前の畑の中を走る舗装道路を少し東へ行った所の、のり面で、ちょうど花どきであった。60年8月22日である。エゾノキツネアザミ、オオヨモギ、オオアワダチソウそれにヨシなど大形植物との混生で競合の結果によるのか、エゾノミズタデは草丈100~130cmにも達していた。ただ花穂は貧弱で長さ1.5~2.0cm、水中型の約半分にすぎなかった。バイクの上から一見してすぐそれと分ったのは、かって白老町竹浦の沼でこの

水陸両型に親しく接していたためである。

その後この陸上型は茨戸湖畔のヤナギ類の林、JR発寒駅近くの軌道沿、野幌森林公園それに東米里にもあることを知った。一方水中型は、東米里の排水溝のたまり水の中に花をつけた1株をみたにすぎない。昨年夏のことである。

以上のことから、昔各地にあった湿地帯には広くエゾノミズタデが繁茂していたことがうかがわれる。それにしても大きな環境の変化に臨機応変し生活できるとは、いったいどうなっているのであろうか。

国道36号線沿の羊丘に咲くハマヒルガオ

61年8月のことである。36号線南側のり面は、オーチャードに占領されていたが、その中のハマヒルガオは花が華やかなので容易に目についた。その生育範囲は長さ11m、上下の巾2mほどであった。夏季には少なくとも1回は草刈が行われているのに昨年も元気に花をつけていた。これはいつのことか知らないが、道路工事にもなう土または張り芝の中の根が種子に由来するものと思われる。本種は海浜植物であるだけに今後はどうなるのか経過を見守ってゆきたい。

同じような例が外にもある。まずウラジロタデである。豊平区西岡2条12丁目の車道沿に、茎の数でこれが約100本あり草丈100cm前後、6月下旬に花期となる。本種は苦小牧を中心に千歳から門別や白老にかけてふつうにあるもので、やはり上記の理由によるのであろう。また貞駒内柏丘の造成宅地の斜面にサワヒヨドリ、カセンソウ、ナガボノシロワレモコウ、ホザキシモツケそれにヒメシダなどが生育している所がある。これらもあのあたりには本来あり得ない種類である。

ところで本件は、フロラ作成の場合、考慮すべき古くして新しい課題といえよう。大渡忠太郎は「上手のフロラ」(植物学雑誌1897-明治30年10月)の中で次のように書いている。上手といえ人工的のもの、運輸の便が開けるにつれ、遠方より運んできた土の中に混入している根株が種子により、その付近のフロラと全く異ったものが生じて怪しむに足らない。5-10年もすればそこに適応し、近傍へ侵入することとなろう(以下東京の実例略)。